二松学舎大学　ニュース IR

News ＩR

ＩＲ（Institutional Research/インスティテューショナル・リサーチ）は、大学組織において何らかの決定を行う際に、それをサポートするための情報収集と分析を意味します。

二松学舎大学では、大学の機関活動に関するデータ収集・分析を行い、大学がどのような課題を抱えているのか、その課題はどのような要因と関連しているのか、今後どのような意思決定を取り得るのか等を客観的に把握し、政策形成・意思決定を支援するための活動を行っています。

2023年度 2号（NO.16）

Contents

◆ 学生の実態・満足度調査の実施について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

◆ 二松学舎憲章　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

◆学生の実態・満足度調査の実施について

2023年11月14日～12月4日（延長期間：12月7日～1月10日）にかけて、「学生の実態・満足度調査」を実施しました。調査はWeb形式で行い、大学生活全般に関する55問（5段階の選択回答方式等）と2問（自由記述方式）に回答してもらいました。

➢本調査の実施目的
①学生の本学の「学び」に対する満足度を定量的に把握すること。
②他大学と比較することで、本学の特徴を定量的かつ可視化して認識すること。

●回答率について

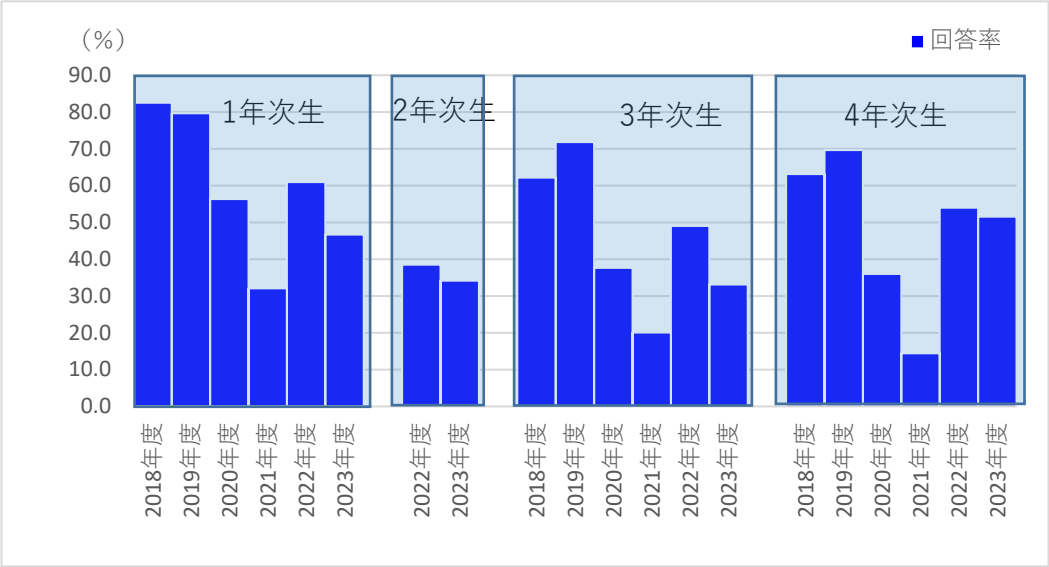
▼　回答数

回答者数	文学部				国際政治経済学部		合計	回答率(%)
	国文学科	中国文学科	都市文化デザイン学科	歴史文化学科	国際政治経済学科	国際経営学科		
1年	185	15	14	15	56	88	373	46.7
2年	89	25	37	51	13	55	270	34.2
3年	126	21	11		5	63	226	33.1
4年	167	62	16		27	99	371	51.5
全体	567	123	78	66	101	305	1,240	41.5

（回答率：回答数／在籍者数）

2023年度の「学生の実態・満足度調査」は、必修授業等の科目担当者の協力を得て、授業内で実施しました。回答者数はゼミナール等の科目担当者から受講生に直接声をかけて回答を促してもらうなどで増加しています。全学年での平均は41.5%、特に卒業時調査となる4年次生は、昨年度に引き続き50%以上の回答を得ることができました。

▼　回答数の変遷（2018年度以降）　※2年次生は2022年度から実施



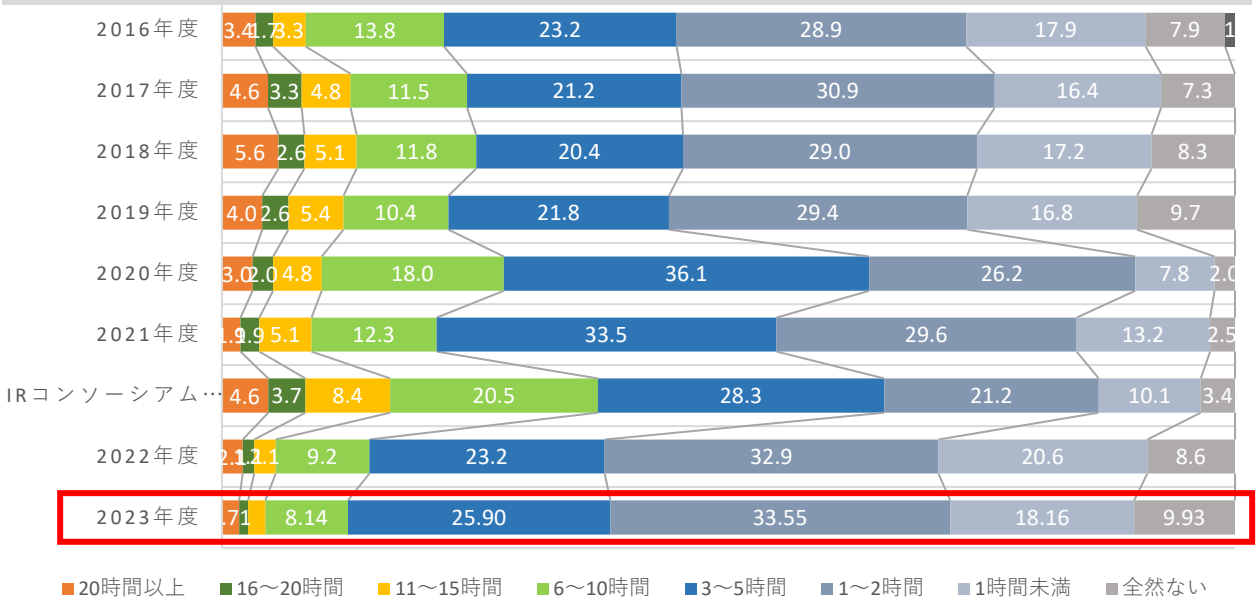
2023年度は前年度より回答率が全学年で低下しました。実施期間中、4年次生は卒業論文の提出などがあり、当該日以降から指導教員から個別に声掛けをしています。

全体では平均で40％を超えた回答者に対し、回答したことに対して何かフィードバックがあり、声が届いているという実感が持てないというところも原因の一つではないかと考えられます。

アンケートを実施するだけでなくその集計結果やそれを受けての大学の対応状況等を学生たちに提示していく必要があります。

● 学生の学修時間について

▼　1週間あたり、「授業時間以外に授業課題、準備学習・復習をする」ことにどの程度の時間を費やしましたか（2022年度からは全学年の回答の合計）



2016年度～2023年度　授業課題、準備学習・復習をする時間（週単位）の変化

2023年度は、1週間あたり3～5時間学習した学生の割合が増加し、また1～2時間学習したという割合も増加しましたが、全然ないという学生の割合も増加しました。アンケートでは、1週間あたりの「アルバイトをする時間」「個人的な趣味・活動する時間」「スマートフォンをみる」など行動特性を聞いていますが、授業以外の学習時間の多寡とそれらは特に法則性はみられませんでした。

大学は単位制度の実質化が求められている中で、授業はもとより、その前後で学習意欲を掻き立てるようなシラバス作成や、課題、単位を取得するために必要な時間数を意識した事前事後学習を提示することなど、これまで以上に学習環境を整備していく努力が求められています。

● 2020年度入学生の教育内容等満足度の経年変化

▼　2020年度に1年次生として入学した学生が、2023年度には4年次生となり、この3月に卒業を迎えました。2020年度入学生の満足度の経年変化を分析し、入学後の学生の修学実態を把握するとともに、大学の教育成果や本学が抱える課題等の検証材料として、教育改善に活かしていくことが肝要です。

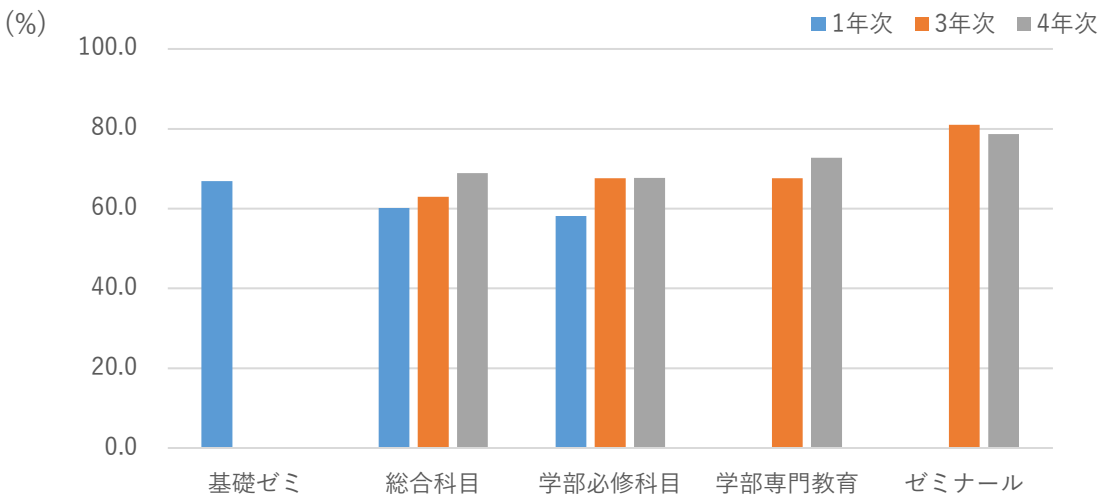
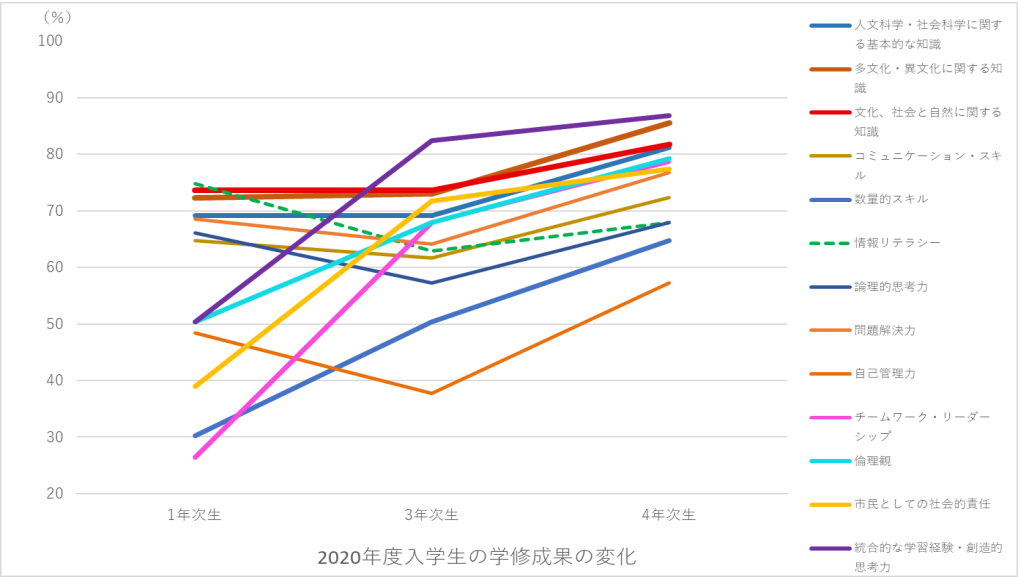


図2　2020年度入学生の教育内容等満足度の経年変化

多くの科目で満足度は年々増加し、特に３年次の専門教育では67.6％→72.6％と上昇しています。4年次のゼミナールでは、2.3ポイント減少しているものの、他の科目と比較して高い満足度を得ています。
自由記述にも「ゼミナール」の充実に対する記述が多くみられ、回答者の多くは、本学のゼミナール教育に高い満足を得ているといえます。

● 2020年度入学生の学修成果の変化

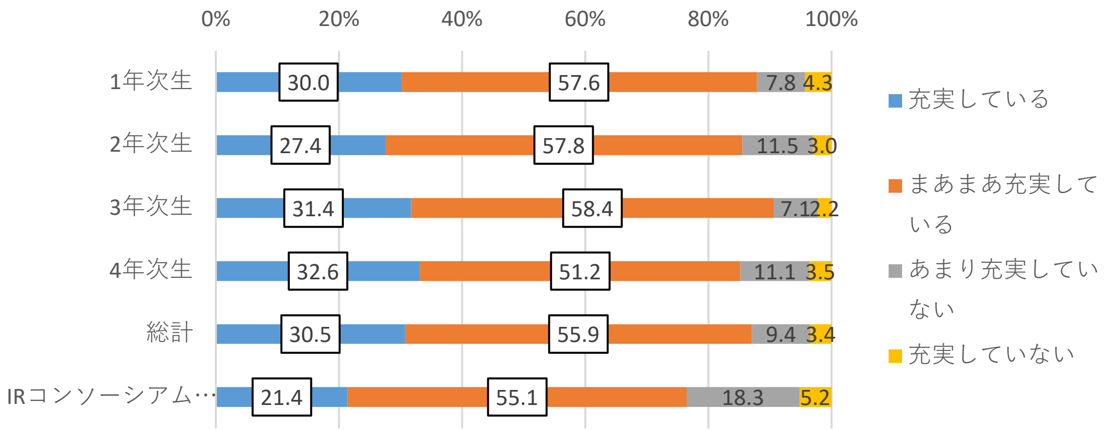
▼　入学した時点と比較して、能力や知識はどのように変化しましたか（「大きく増えた」・「増えた」と回答している割合）（値は％）



今年度卒業する学生たちは、入学時には世界がパンデミックの中、誰も経験したことがない状況での大学生活のスタートを切りました。
「学士力項目の能力等が増えたと思うか」の自己判断を聞いた設問で、「知識・理解」は知識習得段階から研究段階に進んだ4年次生で増加したと感じていることが示されました。「論理的思考、チームワーク・リーダーシップ力、倫理観、社会的責任、統合的な学習経験・創造的思考力」などは右肩上がりの成長を示しており、大学4年間での学びがオンラインと対面の変遷はあっても各種の活動をとおして、 成長を感じていることが示されました。

●　大学生活は充実していますか？

▼　大学生活は充実していますか?　と問う質問に対して、各学年ごとの割合（%）を示します。



全体で「とても充実」＋「まあまあ充実」の平均は、86.4%であり、ＩＲコンソーシアムでの学生調査の2021年度集計結果76.5%と比較しても高い数値が得られました。

コロナ禍を経て、オンラインから対面へと移行してからも、おおむね充実しているという声が80%を超えており、本学での学びや出会いが大学生活の充実度に大きく寄与しているといえます。

＊なお、ＩＲコンソーシアムの学生調査は、1年次と上級生（２・３・４年次生）の結果の平均を提示しました。

●大学生活は充実しますかという設問において、「その理由」について尋ね、自由記述で答えてもらいました。

大学生活が「とても充実している」＋「充実している」と答えたグループと「あまり充実していない」＋「充実していない」と答えたグループで、その理由についての自由記述にみられた頻出単語をポジティブな記述、ネガティブな記述で分類し、集計しました。

充実していると回答したグループ (n=512)

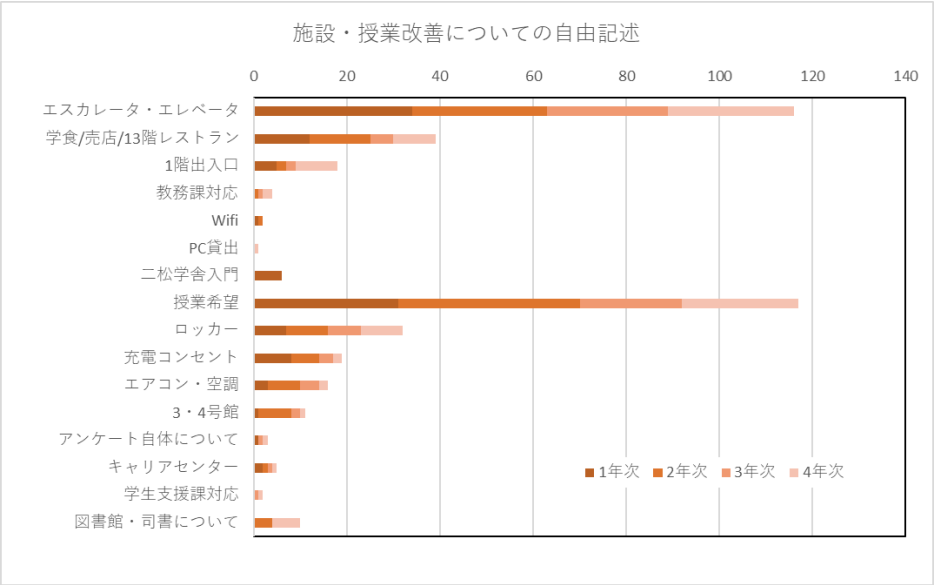
充実していないと回答したグループ (n=62)

いずれのグループでも「大学」という単語が最も多く現出していました。大学に対する思いや理想を語る言葉が多く見られました。

今年度の在学生は、高校時代の3年間～大学入学時がコロナウィルス感染症の蔓延により、行動が規制された年代でもあります。自分が本来だったら過ごせるはずだった（理想の）大学生活に思いをはせながら、現状でできることを考える前向きな意見が多くみられました。

今後「予測困難な時代を生き抜く力」を養うために大学での教育教養は何をしたらよいのか、大学に求められていることが自由記述の中にも潜在していると思われ、貴重な意見として今後も分析を続けていきます。

● 大学の施設・設備等で改善してほしいところを尋ね、自由記述で回答してもらいました。



本学は九段下という立地上、周辺環境や交通の利便性は高いといえますが、建物上の制約は否めず、3,000名を超える学生たちの階層移動にはかなり改善の声があることは事実です。ハード面の問題はなかなか解決できませんが、ソフト面では「こうしたらよいのではないか」という学生からの提案や改善案なども、このアンケートから読み取ることができます。

大学生活の基盤となる学習環境をより良いものするために、学生たちの声に真摯に向き合い、改善していきます。

【二松学舎憲章】

＜建学の精神の発揚＞

・教職員は、建学の精神「東洋の精神による人格の陶冶」、「己ヲ修メ人ヲ治メ一世ニ有用ナル人物ヲ養成ス」の発揚に努めます。

＜教育・研究の目標達成＞

・人材育成のため、自らその体現者となるべく、自己研鑽に努めます。
・法令及び学則を順守し、道徳心と倫理観を持ち、職務に当たります。
・現状を把握し、自ら課題を見つけ、教育・研究の質の向上に努めます。

＜学生生徒支援＞

・教職員一人一人が、学生生徒の人格と人権を尊重します。
・教育・研究の充実に常に努め、教育・研究環境の整備を行い、学生生徒の満足度向上を目指します。

＜社会貢献＞

・教育・研究活動を通じて、地域社会への貢献に努めます。
・社会情勢に常に目を向け、国際社会と世界平和に寄与します。

【発行主体】
二松学舎大学
大学改革推進部　ＩＲ推進室
〒102-8336　東京都千代田区三番町6番地16
TEL (03)3261-1285
FAX (03)3261-7413
[E-mail] gakumu@nishogakusha-u.ac.jp
2024年 3月 29日発行